

指令主義における真理:機能主義と対応説の比較

駒田珠希(北海道大学)

本稿では、Hare が提唱した指令主義における道徳文の真理を最もよく説明する真理の理論はどのようなものかを検討する。従来、Hare の指令主義は、情動主義から発展したという歴史的背景のために、道徳文の真理を否定する非認知主義を採る立場として理解されてきた。本稿では、Hare(1961, 1997)の議論を詳細に追うことで、彼が道徳文の真理適合性を認めていることを示す。そのうえで、指令主義を認知主義的に解釈した際の道徳文の真理に関して、Hare の見解を再構成する二つの方法を提示し、それらを比較検討する。一つ目の方法は、Lynch(2001, 2009)による機能主義を援用したものであり、二つ目の方法は Newman(2002)の対応説を援用したものである。

指令主義において、道徳文は記述的意味(descriptive meaning)と評価的意味(evaluative meaning)の二つの意味を持つとされている。記述的意味は事実に関する記述的な情報を伝え、評価的意味は記述された対象や性質についての指令という言語行為を遂行するものである。さらに、記述的意味は、判定基準的側面と記述的側面の二つの側面に分けて考えることができる。判定基準的側面は、ある人がある対象を「よい」と判断する際の基準を示すものであり、記述的側面とは、実際に「よい」と判断された際にその語が指している性質や事実の記述である。例えば、ある人が、優しくて寛容でトランプでずるをしない人物に対して「彼はよい人だ」と判断したとする。この場合の記述的意味における二つの側面は、それぞれ次のようになる。判定基準的側面は、「『よい』と判断する際の基準は(優しくて寛容でトランプでずるをしない)ことである」ということを示しており、記述的側面は「『彼』によって指されている人物は、実際に優しくて寛容でトランプでずるをしない」ということの記述となる。

Hare(1997)は、指令主義における道徳文の真理を認めている。そのため、指令主義の枠組み内で道徳文の真理を説明できる真理の理論はどのようなものか、という疑問が生じる。しかし、この点について Hare 自身は明確な理論を提出していない。以下では、現代の真理の理論(とりわけ、Lynch の機能主義と Newman の対応説)を援用しつつ、指令主義における道徳文の真理の理論を再構成する。

Hare によれば、指令主義において道徳文の真理は記述的意味が担っている。そのため、道徳文の真偽については、記述的意味が二つの側面を持つことを考慮し、それぞれに応じて慎重に検討する必要がある。記述的意味の記述的側面に関しては、通常真理の対応説で扱うことができる。つまり、先の例を用いるならば、以上の状況において「彼はよい人だ」が真となるのは、「彼」によって指されている人物が実際に「優しくて寛容でトランプでずるをしない」場合において真となる。一方で、判定基準的側面に関しては、その判断者が用いているその判定基準と、客観的事実として存在する「道徳原理(moral principle)」が一致するかどうかで真偽が決まる。道徳原理とは、道徳判断を下す際に私たちが参照する基準として Hare が持ち出したものである。この原理は私たちによって作られたものではあるが、歴史的・文化的に確固たる地盤をもつため、客観的事実として存在するものである。

ただし、道徳原理が客観性を有するものとはいえ、それが私たちによる構築物であることを考慮すれば、道徳原理との一致は mind-independent な事実との対応関係ではなく、mind-dependent な事実との関係を扱うことになる。伝統的な対応説は mind-independent な事実との対応関係を扱うものであるため、この理論を用いて道徳原理との一致を説明することは困難である。この理由により、指令主義の枠組み内で道徳文の真理を説明するためには、記述的側面における真理(=

mind-independent な事実との対応として理解できる)と判定基準的側面における真理(=mind-independent な事実との対応として理解できない)を同時に説明できるような真理の理論、つまり多元性を許すような真理の理論が必要となる。

そこで、本稿では、指令主義における道徳文の真理を説明するために、真理の多元性を認める Lynch の機能主義を援用する方法と、対応の多元性を認める Newman 流の対応説を援用する方法の二つの方法を提示する。なお、この二つの理論に焦点を当てる理由は、これらが(1)指令主義における道徳文の特徴をよく汲みつくすものであること、(2)真理の理論として説得的であることの二点による。

方法1: Lynch の機能主義

Lynch の機能主義とは、真理概念自体は同一であるが、その真理概念を顕在化する性質は言説の種類ごとに異なると主張する立場である。つまり、この立場は、真理概念の一元性を保持しつつ、その顕在化の仕方において真理の性質の多元性を認めるものである。

この理論を援用して指令主義を再構成した場合、記述的側面は対応という性質によって、判定基準的側面は超整合性という、Lynch が提示する性質によって真理を顕在化すると考えることができる。真理の一元性を保ちつつ、各側面における真理の性質の違いを顕在化の仕方の違いとして説明することになる。

方法2: Newman の対応説

Newman 流の対応説とは、真理の性質を対応であるとしつつ、異なる種類の言説ごとに異なる種類の対応を認める立場である。彼によれば、異なる種類の文は、異なる方法で世界と関係しているものの、どのような文脈においても「真である」という語は同一の性質を意味している。つまり、Newman 流の対応説は、対応という真理の一元性を保持しながら、対応の仕方において多元性を認める立場であるといえる。

この理論を援用して指令主義を再構成した場合、記述的側面における真理は mind-independent な事実との対応、判定基準的側面における真理は mind-dependent な事実との対応として捉えることができる。各側面における異なる種類の対応を認めながら、文全体を対応説的に説明することになる。

以上のように、本稿では Lynch の機能主義と Newman の対応説を援用することによって、指令主義における真理の理論を二つの方法で再構成し、それぞれの特徴、利点、難点について比較検討していく。

【主な参考文献】

- Cory D. Wright & Nikolaj J.L.L. Pedersen, (2010) “Truth, Pluralism, Monism, Correspondence”, *New Waves in Truth*, Palgrave-Macmillan, 205-217
- Hare, R.M. (1961), *The Language of Morals*, Oxford University Press (小泉仰・大久保正 健訳、『道徳の言語』、勁草書房、2003)
- Hare, R.M. (1997), *Sorting Out Ethics*, Clarendon Press
- Newman, A. (2002) *The Correspondence Theories of Truth: An Essay on the Metaphysics of Predication*, Cambridge University Press
- Lynch, Michael P. (2001) A Functionalist Theory of Truth. In *The Nature of Truth*. Ed. Michael P. Lynch, Cambridge, MA:MIT Press
- Lynch, Michael P. (2009) *Truth as One and Many*, Clarendon Press
- Oxford University Press
- Wright, C. (1992) *Truth and Objectivity*, Harvard University Press